

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 10 日現在

機関番号：20105

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06523

研究課題名(和文) ヴェスパシアーノ・ゴンザーガの肖像研究：16世紀スペイン統治下のイタリア美術政策

研究課題名(英文) Study on the portraits of Vespasiano Gonzaga Colonna : the art politics in Italy under Habsburg Spain in the 16th century

研究代表者

望月 由美子 (MOCHIZUKI, YUMIKO)

札幌市立大学・デザイン学部・専門研究員

研究者番号：10759046

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：北イロンバルディア地方のサッピオネータ公爵ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナはスペイン王フェリペ二世、神聖ローマ皇帝の傭兵隊長として実績を築き、優れた外交手腕、軍事建築の技能、芸術文化の庇護者として名声を馳せた人物である。本研究は16世紀後半から17世紀にかけてスペインが教皇領、ヴェネツィアなど一部地域を除くイタリア半島のヘゲモニーを握った時代、スペイン宮廷美術がイタリア諸都市国家の芸術施策、とりわけ君主像に及ぼした影響をヴェスパシアーノの君主像を取上げて検討した。その際ハプスブルク家の広域的な芸術ネットワークに留意して同時代史料読解を行い、様式、意味内容、パトロネージの特質を明かにした。

研究成果の概要(英文)：Vespasiano Gonzaga Colonna, the first Duke of Sabbioneta in Lombardy of the North Italy, was a man of great capacity as a condottiero of the King of Spain Philip II and the Holy Roman Emperors, a diplomat, a military architect and a distinguished patron of arts-sciences. This study, taking up the portraits of the Vespasiano, examined how the Spanish court-arts had influenced on the art politics of the Italian city-states, especially on the Italian load images from the second half of the 16th century to the 17th century when the Spanish Empire has established the hegemony in Italian Peninsula except some regions like the Papal State and the Republic of Venice. Going through the contemporary chronicles in view of the broad network structured by the House of Habsburg, I brought out the characteristics of the style of works, the meanings and the patronage.

研究分野：美術史

キーワード：ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナ 肖像 サッピオネータ ゴンザーガ家 スペイン・ハプスブルク家 フェリペ二世 アントニス・モル レオーネ・レオーニ

1. 研究開始当初の背景

イタリア戦争(1494-1559)を背景にハプスブルク家が半島における覇権を樹立した時代、イタリア諸都市国家が外交戦術として利用した芸術作品、とりわけ宮殿内の壁画装飾や巡行・入市式の祝祭文化について、本研究代表者はこれまで北イタリアを代表するルネサンス宮廷都市マントヴァのゴンザーガ家の文化事業を中心に研究してきた。

その過程で1980年代より、16世紀前半の神聖ローマ皇帝カール五世の時代における半島とハプスブルク家の文化的影響については、絵画彫刻、祝祭、蒐集趣味、驚異の部屋(ヴンダーカマー)研究等を通じて進展していたのに対し、16世紀後半のハプスブルク家がスペイン王家とオーストリア皇帝家に分かれた後の関係性、とりわけカール五世の息子でミラノおよびナポリ王国の支配を継承したスペイン王フェリペ二世の宮廷文化とイタリア諸都市との美術面における影響関係については掘り下げた議論のないまま等閑にされていた状況が浮彫となった。これはハプスブルク宮廷文化のみならず、16世紀後半のイタリア美術史研究においても無視しえない欠落であり、そこから本研究を構想するに至った。

2. 研究の目的

(1) 今回は研究代表者がすでに研究蓄積をもつゴンザーガ家宮廷の中から、14歳からスペイン王フェリペ二世の名誉近習としてハプスブルク宮廷に仕え始め、理想都市サッピオネータの建設者としても知られる傍系貴族ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナ(1531-91)の美術事業を本課題における好例として取上げる。具体的には絵画・彫刻作品におけるヴェスパシアーノの君主像の様式分析、パトロネージの特徴を、当時のスペイン・ハプスブルク家、フェリペ二世および有力家臣たちの美術事業および広域的な彼らの芸術ネットワークとの関連から検討し、その影響関係について考察を行う。

(2) 文献史料に関しては、1831年にオーストリア政府の判断のもとマントヴァ古文書館に移されていたサッピオネータの史料が処分された経緯から、ヴェスパシアーノの時代を含むサッピオネータの歴史文化に関する一次史料が著しく欠損した状況であったため、同時代の年代記作者A・リスカ(1592)、G・ファロルディ(1592年頃)がヴェスパシアーノの死後間もなく出版した公爵の伝記、当時サッピオネータの宮廷官僚を務めたニコロ・デ・ドンディの日記(1580-1600)、17世紀のマントヴァ出身の歴史家F・アマデイの年代記(再版1956)、18世紀にパルマのパラティーナ図書館長代理を務めた歴史家・修道士I・アッフォ(1780)編纂のヴェスパシアーノの伝記を主たる文献学的典拠とし、史料批判を加えつつヴェスパシアーノ

を取り巻く時代状況について調査を進める。

3. 研究の方法

(1) 同時代史料と最近の研究成果の双方の資料収集に関しては、マントヴァ市立テレジアーナ図書館、同市国立古文書館、プライデンセ図書館、フィレンツェのドイツ研究所、同市国立中央図書館、ヘルツィアーナ図書館、プラド美術館付属図書館、スペイン国立図書館で中心に行い、資料精読を通じて当時のサッピオネータおよびヴェスパシアーノを取り巻くイタリアおよびスペインが抱えた政治宗教状況、芸術家や文化人との信仰関係、隣国パルマやグアスタッラとの文化的影響関係、さらにスペイン宮廷での奉仕を通じて親密な関係を築いたアルバ公爵や後の神聖ローマ皇帝ルドルフ二世のパトロネージの影響などを調査し、ヴェスパシアーノの君主像の制作がどのように進められたのか検討する。

(2) 図版資料の収集に関しては、コモ市立美術館、サッピオネータ教区サムエーレ・リーヴァ司祭(聖母戴冠聖堂の管理者)、サッピオネータ観光協会、マントヴァ・クレモナ・プレーシャ県文化財監督局、インスブルックのアンプラス城、ウィーン美術史美術館に撮影許可を申請し、科研費で購入したカメラを用いて写真撮影・画像資料整理を行う。プラド美術館とエル・エスコリアル修道院に関しては撮影許可が下りないため(画像使用許可権をイメージ・バンクに依頼して購入は可能)、代わりにプラド美術館付属図書館にある画像データで細部を確認する。

(3) ヴェスパシアーノの肖像のうち、彼が依頼したと推定されている作品は現在6点(油絵2点[オリジナル作品とその模写]、ブロンズ製の全身座像1点、大理石製の胸像1点、木彫騎馬像1点、彩色漆喰浮彫1点)存在する。今回分析を試みるのは以下の3点である。

1点目は現在、コモ市立美術館所蔵されているアントニス・モル作《甲冑姿のヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナ》(1559頃)である。制作者のアントニス・モルは16世紀のハプスブルク宮廷の肖像画を牽引した人物の一人であり、スペイン王の他、皇帝マクシミリアン二世、英国女王メアリー1世、オレンジ公ウィリアム1世等の肖像画も手掛け、当時の絶対君主像のいわばスタンダードを創り出した人物である。この著名な肖像画家にヴェスパシアーノがどのような君主像を期待して依頼したのか他作品との比較から検証する。2点目は、サッピオネータのドゥカーレ宮殿内に設けられた肖像ギャラリー「祖先の回廊」である。サッピオネータ出身の工人アルベルト・カヴァリが制作したと推定される、ヴェスパシアーノを含む歴代ゴンザーガ家当主を表した壁面の漆喰肖像レリーフについて、同時代のとりわけフ

ェリペ二世の肖像ギャラリーとの比較検討を行う。3点目は、現在サッピオネータの聖母戴冠聖堂内ヴェスパシアーノの霊廟上にあるレオーネ・レオーニ作ヴェスパシアーノのブロンズ彫像である。レオーネ・レオーニはカール五世、フェリペ二世の二代に渡りハプスブルク家で重用された肖像彫刻家、金属工芸家であり、ハプスブルク家の帝国主題を喧伝した作家であり、様式分析、図像学的考察、意味機能についてスペイン宮廷の肖像文化との比較という視点から考察する。

4. 研究成果

(1) まず、アントニス・モルが描いたヴェスパシアーノの肖像画(油彩板絵)については、作図を施して具体的に構図上の特徴を洗い出し、1550~60年代にかけてモルが手掛けたハプスブルク家一族および同家家臣の宮廷肖像画についても同作業を行い、それらの基本構造が一致した点を確認した。

具体的には、像主を画面中央に据え、右向きの四分の三肖像、太腿から上を描いた六部身像の形式で、背景は黒一色、上下を結ぶ中心軸線上に片方の目と胴体軸を配置する。上下四分劃した画面の上四分の一に頭部、上四分の三に上半身、画面下四分の一分に像主のアトリビュートが収められ、中心軸の頂点から肩、肘のラインに沿って二等辺三角形の構図をとる。幾何学的枠内に身体を収める堅固なこの肖像形式は、モルがハプスブルク家の宮廷肖像画家として引き立てられる1549年頃から、スペイン宮廷を去る1560年代初頭までの貴顕肖像画に繰り返し用いたいわばプロトタイプであることがわかった。また今回の調査で、これが1520年代よりティツィアーノが肖像画に採用した六部身像・四分の三肖像の形式に影響を受けてモルが完成させたさせたものであり、ティツィアーノ作マントヴァの初代公爵《フェデリコ・ゴンザーガ二世》(プラド美術館)が構図的参照源である可能性も指摘した。

さらにフランドル画派特有の細密な筆致、迫真的な顔の写実表現、簡潔な構図を得意としたモルの様式は、スペイン王フェリペ二世にとりわけ気に入られ、17世紀に黄金時代を迎えるスペイン宮廷肖像画の出発点をなした点も確認した。イタリアとスペイン宮廷の美術的影響、芸術生産の視点からもスペイン宮廷の芸術嗜好については掘り下げていくべきテーマであり、これについては新たな課題を設定して研究を継続したいと考えている。

(2) サッピオネータのパラッツォ・ドゥッカレにヴェスパシアーノが設けた「祖先の回廊」Galleria degli Antenatiにはゴンザーガ家の人物を表した漆喰レリーフによる胸像がぐるりと四壁面すべてを取り巻くように配置されている。ゴンザーガ家の始祖であるルイジ・ゴンザーガからヴェスパシアーノ

の嫡子ルイジの代まで計21体、君主及びその正妻の肖像がペアとなって時計回りに並び、マントヴァの本家からサッピオネータの傍系まで辿る一族の歴史を示す展示形式をとっている。16世紀後半から18世紀にかけて西欧宮廷で高まった一族の肖像の蒐集熱とそれを展示するギャラリーの誕生は、ハプスブルク家出身の著名なコレクター、チロル公フェルディナンド二世がインスブルック郊外のアンブラス城に蒐集した凡そ1000枚もの一族の肖像画、1591年より一部一般開放されたウフイーツイ美術館のメディチ家肖像コレクションなどはその代表的事例であり、サッピオネータの作例も同様の宮廷文化傾向に倣ったものといえる。

また直接的影響源と指摘できるゴンザーガ家一族の肖像コレクションを蒐集したグアスタツァ公爵チェーザレ・ゴンザーガの書齋や、フェリペ二世がマドリッド近郊のエル・パルド宮殿に設けた肖像ギャラリーとの比較検討からも考察を進めた。さらに天井画の太陽神の図像や部屋の東西南北の方向性にヴェスパシアーノの知的関心事の一つである天体運行との相関性が示されていたことを指摘し、ここでは太陽の永遠的生命にあやかり、ゴンザーガ家一族の永続支配を祈念したものと読み解いた。

(3) 最後のレオーネ・レオーニ作ヴェスパシアーノのブロンズ像は、ニコロ・デ・ドンディの日記から、当初は同市のドゥッカレ宮殿前に置かれ、ヴェスパシアーノの遺言に基づき、公爵の死後、その霊廟に移されたことが知られている作品である。従来の研究から図像源を古代ローマ風の衣装を纏い右手を軽く上げたポーズからカピトリノの丘上にあるマルクス・アウレリウス・アントニウスの騎馬像、レオーネの息子ポンペイがフェリペ二世の入市式に準備したスペイン王の肖像彫刻(1570)、その他フィレンツェのメディチ家礼拝堂にミケランジェロが制作したジュリアーノ・デ・メディチの墓碑像、ヴェネツィアのサンタ・マリア・デイ・フラリ教会堂におけるヤコポ・サンソヴィーノ作《洗礼者ヨハネ》(1550年代後半)など様々に指摘されてきたが、今回の調査でミラノ派の宗教絵画からの影響もさらに確認でき、同作家がローマで習熟した古典古代様式に加え、同時代の複雑な人体表現を学びとり入れたまさにマニエリスムの作品であったことが明らかとなった。

レオーネの古典様式と写実技量はとりわけカール五世に称賛され、アルバ公などハプスブルク家重鎮をはじめ、親ハプスブルク派であったジェノヴァのアンドレア・ドーリア、初代グアスタツァ公爵フェランテ・ゴンザーガ、本家マントヴァの依囑も受けてハプスブルク帝国様式を成し、その文脈のなかでハプスブルク家の傭兵隊長であるヴェスパシアーノもまた同じマニエラで自分の肖像彫

刻を依頼していたと結論づけた。

さらに、都市の公共広場に存命中の人物の栄光を称えた 16 世紀の肖像彫刻としてジャンボローニャ作トスカーナ大公コジモー世の騎馬像が先行例として挙げられるが、ヴェスパシアーノの彫像は彼の死に伴い、像主の肉体と共に霊廟に遷座し、死後もつねに像主の分身 = 代理表象として像主と運命を共にするなど、像の意味機能・受容形式に変化を生んだ特異な作品であった点も考察した。

図像学的には足元の大地の塊はサッピオネータを表し、エル・エスコリアル修道院所蔵のモル作《武装姿のフェリペ二世》でフェリペが微かに見える大地を踏みしめた姿でスペイン帝国支配を示していたのと同様の象徴性を担い、古代ローマの甲冑姿に君主の肖像彫刻としては珍しい書物を左足の上に置く姿は、文武両道として誉れ高いヴェスパシアーノのためのアトリビュートとしてレオーニが与えたものであった。

先行研究ではまた右手の動きが正義の概念に関連する古代ローマ皇帝のクレメンティアの身振りと一致するものと指摘しているが、身振り・姿勢についてはさらなる検討を要するところであり、今回取り組んだ遷座する像と併せて、これらの問題についてのより詳細な検討・公開を今後の課題として進めていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

望月由美子「サッピオネータのパラッツォ・ドゥカーレにおける「祖先のガッレリア」：ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナの肖像ギャラリー構想」、SCU Journal of Design & Nursing、査読有、vol. 10、2017年(頁未定)。

望月由美子「アントニス・モル・ファン・ダスホルスト作《ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナの肖像》」、日伊文化研究、査読有、第55号、2017年、91-102頁。

望月由美子「イタリア・ルネサンス絵画におけるユダヤ表象 マントヴァの宮廷画家アンドレア・マンテーニャの絵画を事例研究に」、SCU Journal of Design & Nursing、査読有、vol. 9、2016年、3-17頁。

[学会発表](計1件)

望月由美子「サッピオネータ公爵ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナの肖像分析 16世紀後半のスペイン・ハプスブルク宮廷と北イタリアの文化交渉」ルネサンス研究会、2016年7月2日、学習院女子大学(東京都新宿区)

6. 研究組織

(1)研究代表者

望月 由美子(YUMIKO MOCHIZUKI)

札幌市立大学・デザイン学部・専門研究員

研究者番号：10759046